



いずみ野

令和元年8月27日発行
発行責任者 校長 松藤 朋治

豊かな体験ができるまち いずみ野

校長 松藤 朋治

夏休みが明け、子供たちの笑顔が学校に帰ってきました。

学校だより夏休み号に「長い夏休み、ぜひ、素敵な体験の場を設けていただければ幸いです。」と記載しましたが、この夏、そういった体験活動が随所に見受けられました。収穫した巨大ナスを誇らしげに見せた子、校庭で捕まえたカブトムシを大切に育てた子、水泳大会で自己ベストを更新した子、盆踊りの舞台で意気揚々と踊った子、親子キャンプで恐る恐る夜の校舎を回った子、・・・枚挙にいとまがありません。すべて掲載できないのが残念ですが、たまたま出合った一例をご紹介します。



▲「大きいでしょ。」

夏休みに入って間もない頃、校庭でカブトムシを捕まえた子が私のところへ見せに来ました。



▲「樹液をあげてるんだ。」

「これは、オス？それともメス？」

と問いかけました。するとその子は、

「メス。だって、（オスについている）角がないから。」

と即答。

さらに、小枝を手にしているので何をしているのか尋ねると、「樹液を見つけたから、（小枝に）くっつけて あげてるの。」とのこと。さすが、いずみ野の子です。でもあまり食いつきがよくなくて困っているようだったので、

「シロップをあげてみたら？」

と言いました。校長室にはシロップがなかったのですが、そのやりとりを聞いていたある先生が、「シロップの代わりに、砂糖水でもいいんじゃないの？」

と提案しました。早速、その子と一緒に砂糖水を作ってペットボトルキャップに入れて与えました。

翌日、その子が笑みを浮かべながらこう言ってきました。

「砂糖水、あの後よく吸ってたよ。」

それを聞いて、安心したのと同時に自分の幼少の頃を思い出しうれしくなりました。自然環境が残っているいずみ野は豊かな体験の機会に恵まれているということを、再確認しました。

夏休みも終わりに近づいた頃、その子が“続編”を話しに来ました。

「あのカブトムシ、メスだったでしょ。家のそばで、オスを見つけて一緒に飼ったんだ。そしたらね、昨日、結婚したんだよ。」

「それはすごいね。うまくいったら、卵を産み付けるかもね。クヌギの葉っぱとか、手に入った？」

・・・この後も会話が弾みました。この夏、その子はカブトムシの飼育体験を通して生命が連続していくことの大切さや生物愛護の精神を獲得したわけです。その姿には、将来、本校が推進する「持続可能な社会の担い手」になるであろうことを予感させるものがあり、うれしくなりました。子供主体の活動やその結果学んだことは、生涯ずっと心に残り“生きる力”となることでしょう。そういう豊かな体験を子供たちに提供しているまち、「いずみ野」。この夏、改めていずみ野のよさを実感した次第です。これからも、今の子供たちが主役となる約30年後の時代に胸を張って「いずみ野で育てよかった！」と言える、そんな素敵な体験の一つでも多く味わわせてあげたいです。